

「ささえる力 Power」は、情熱と誇りをもって働く「人」にスポットをあて水資源機構の仕事を紹介するコーナーです。

駆ける

いざ、広がる無限のフィールドへ



三重県^{なばり}名張市にある^{しょうれんじ}青蓮寺ダム。美しく区画整備された市街地を車で走ること10分。その堤体が姿を現す。ダムといえば山奥にたたずむイメージがあるが、これだけ市街地に隣接するダムは、全国でも珍しいのではないだろうか。

そんな青蓮寺ダムの管理所に、今年4月、新規採用職員として一人の若者が加わった。今回は、水資源機構の職員として、また社会人として新たな一歩を踏み出した青蓮寺ダム管理所の佐野にスポットを当てる。



青蓮寺ダムは「淀川上流ダム群」の一つであり、洪水調節のほか、阪神地区及び名張市の水道用水を貯える大きな役割を担っている。また、木津川沿岸や名張市周辺の農業用水としても利用され、発電も行う多目的ダム。

Profile

木津川ダム総合管理所 青蓮寺ダム管理所

佐野 友規 Yuki Sano

平成25年4月、電気通信職として水資源機構に入社。最初の赴任地として、木津川ダム総合管理所が管轄する青蓮寺ダム管理所に配属となる。現在、工事の発注や監督、施設の点検など、ダム管理に不可欠な業務に携わり、充実した毎日を送っている。

水資源機構の職員として

8時45分の始業とともに、佐野の忙しい一日が始まる。まずは、ダムの操作室や変電設備の点検。ダムを管理するにあたって欠かすことのできない作業だ。慣れた手つきで点検を済ませると、湖面の巡視に飛び出す。ダム湖はとても広く、一周するだけでもかなりの労力だ。管理所に戻ると、すぐさまデスクに向かう。工事の発注に向けた準備を進めるそうだ。

「少人数の管理所ですので、自分の担当する電気通信関係の業務はもちろんですが、それ以外にも、ダム管理に関する様々な業務をこなさなくてはなりません。忙しい日々が続いていますが、毎日が非常に勉強になることばかりで、ダム管理の奥深さを考えさせられます」と佐野。

「この半年間、青蓮寺ダムの設備を一日でも早く把握しようと心がけてきました。初めは右も左も分かりませんでした。頼もしい上司や先輩方のおかげで、少しずつ自分の知識やスキルが上がってきたことを実感しています。職員としてはまだまだ未熟ですが、一人前を目指して日々奮闘中です。」



志望動機

佐野の出身地は千葉県市原市。学生時代は都内の大学に通った。佐野にとってダムは、身近な存在というわけではなかったし、趣味や観光でダムを訪れることもなかった。

「この会社に入るまで、正直なところダムに関する知識はほとんどありませんでした。学生時代は電気関連の研究をしていましたが、ダムに触れる機会は、これと言って無かったと思います。」

そんな佐野が水資源機構を志望したのはなぜか。

「とにかく、人々の役に立つような仕事をしたかったです。そうした願望があった中、就職活動中に水資源機構に出会いました。水は人々の生活を支える上で、大切なもの。生活基盤として不可欠なもので、経済活動にも重要な役割を担っています。そんな社会全体の必需品を提供する水資源機構でなら、社会に貢献できると思ったんです。」

佐野は続ける。

「とはいえ、学生時代に培った知識をそのまま活かせるわけではありません。一から勉強のし直しで、最初は職員としてやっていけるか不安でした。また、人生で初めて関東を離れたこともあって、赴任先で自分が馴染んでいけるのかも心配でした。ですが、上司や先輩方、寮で一緒に暮らす仲間達が、そんな自分を仕事とプライベートの両面にわたってフォローしてくれました。こうした出会いは、社会人になって本当に良かったと思えることの一つです。」

一人の社会人として

充実した日々を送る佐野。社会人としての自覚も芽生えた。

「まずは一人の社会人として、目の前の業務を一つ一つクリアしていくことが現時点の目標です。入社して初めて給与をいただいた時、自分は社会人なんだ、甘えは許されないんだと自覚しました。ダム管理のプロの一人として、地域や利水者等の関係者、周囲の状況などを常に考え業務にあたらなければいけないのだと。また、青蓮寺ダムでは定期的に、地域の方々を対象とした施設見学会を開催しています。そうした機会を通じて、青蓮寺ダムの地域に果たす役割について、皆様にご理解いただけるよう、丁寧にご説明することも大事な仕事の一つだと思っています。」

青蓮寺ダム管理所の職員として、水資源機構でのキャリアをスタートさせた佐野。しかし、水資源機構には、まだまだ彼が体験したことがないフィールドが無限に広がっている。佐野が今後、水資源機構というフィールドをどのように駆け抜けていくのか、非常に楽しみだ。

思いつきでプライベートの時間を過ごしているときに、一番楽しい時だという佐野さん。

「今を生きる」をモットーに、休日ライフを趣味の旅行やドライブを楽しんでいます。

